

渡邊忠孝日記

十八

大正三年十一月以降

特別
14
1919
267



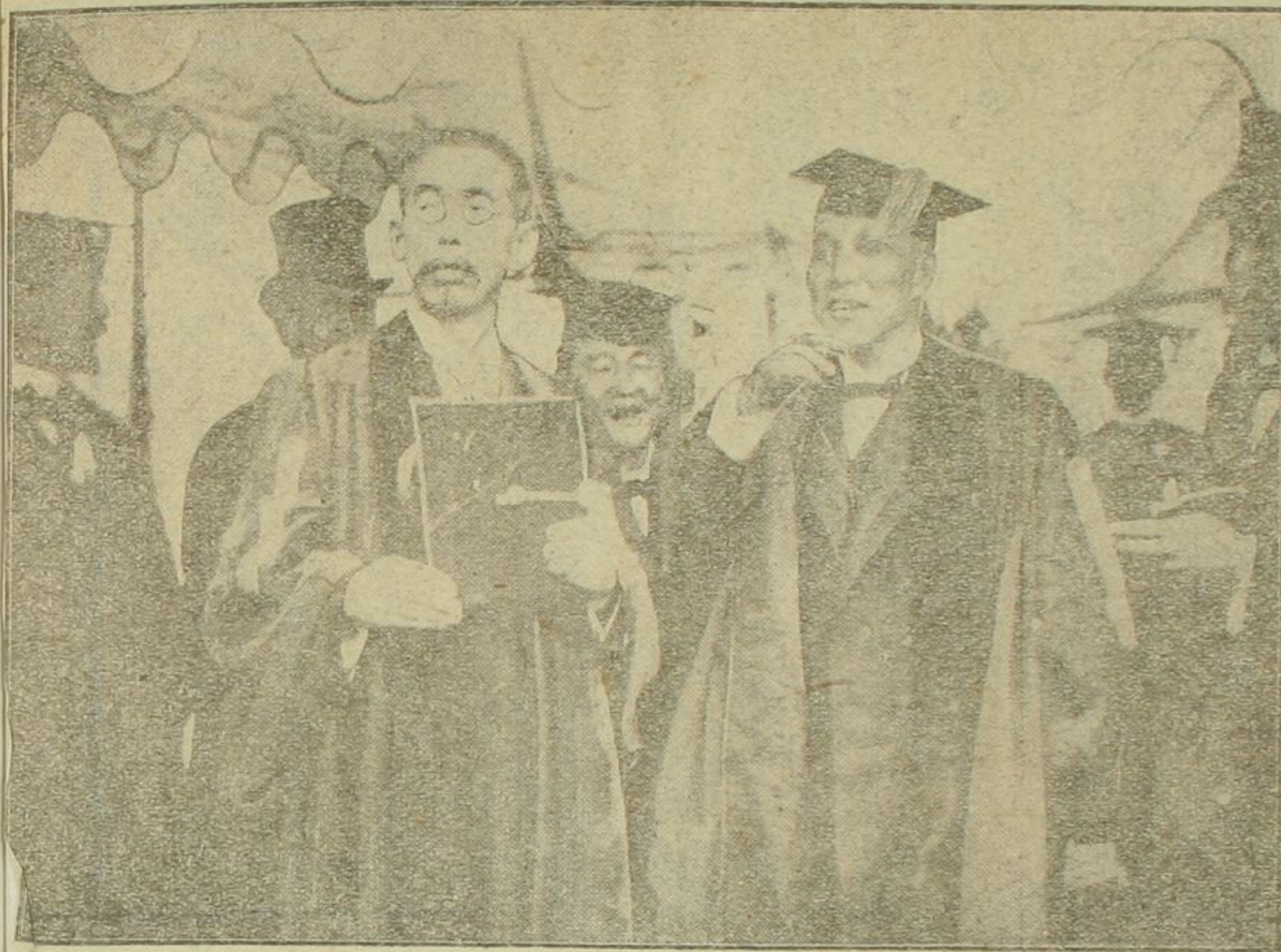
斐文書の日載本十八

大正三年十月閏西旅行中執筆

大正三年十月十七日を早稲の大名の創主三十年
 の祝典と為るのしを校文の特筆すべき日
 也其を前年の十月廿一日に満三十年のむす
 すのりまんと清涼園の庭に思ふ満一年を延
 べしを以て創主の御本を満三十年
 也此の祝典を満三十年を祝するといふ
 七十年前着年とす所謂の二節新造
 一節を先け現之科の紅名一応成るを以
 つて室方之れを祝し大方の成跡を示し更
 々三節の紅書に移らんを祝す也文初

たし喜、歡、奮、興、も伯、老

處る居てし悦喜奮興に歌校の奏合生學友校てり上に壇演後式、長學田高左、爵男澤邊央中、長總禮六りよ右て向

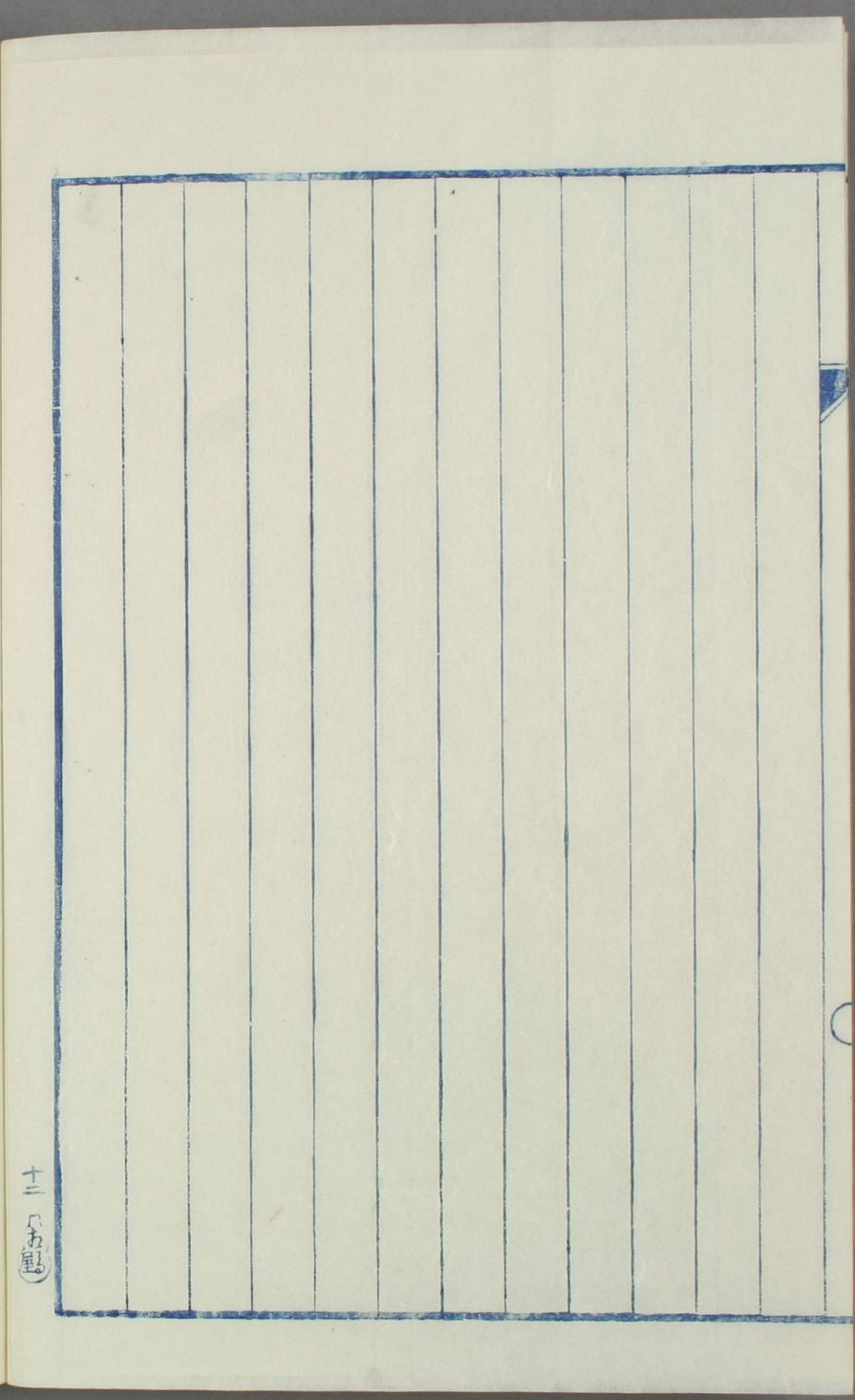
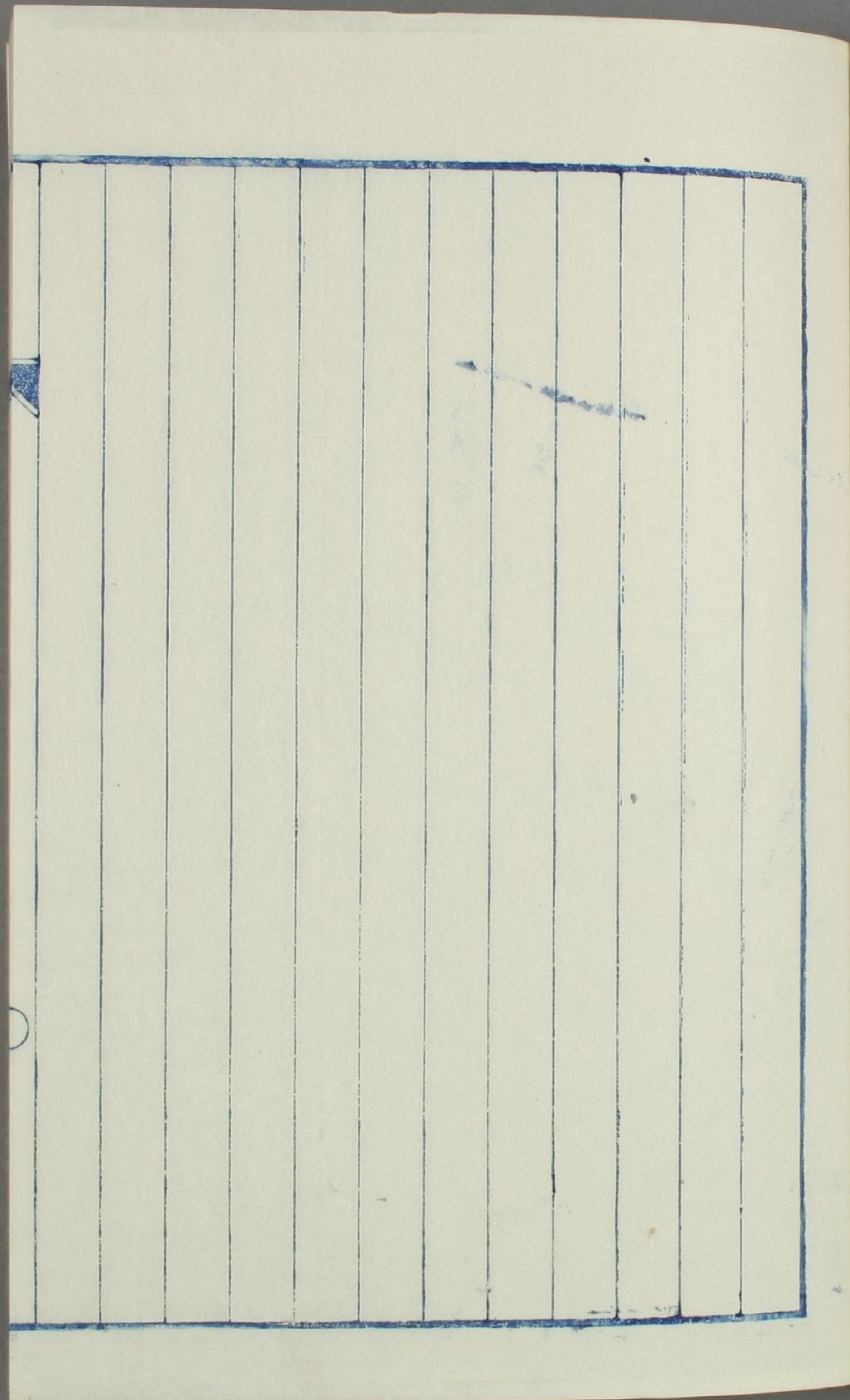


才二幼はを起す
ありとを比翼に
本見理志こそ大なる
言のうつく困難
し或るものと不可
るを説けし才二幼
甚るる才十葉の
提議しつらん自身
七二天初若集の困
難に依着しと心筋
いふ危あふる位
ふささや此のほろも

衝入らるるこのあつとを
他を皆論すも一途も
あもしこいふ力をあも
んをよぬ五ヶ年の苦心
と和、理科、門お薄
大と精方とを
ゆふの衝日
く行い著力
入付のこる葉
り差歌
道新し



大隈伯の宣詞
大隈伯の宣詞



十二
八五
四

〇式以上の増降ありしるも亦提挙行列を
 決行するに可なり然ることを運動するに
 有結果をせらるる事なるべし此の行列の
 目的は専ら此の階下の音外に行きのお守り
 此れを以て之を階下の音外に行きのお守り
 とうと名づけられ決行せしむるに可なり
 為也提挙行列を早稲田の剣意の係りとする
 是年在給七あるも別とくかくしとせり
 要するに前年と異るるを緋の式服と爲
 ける大隈侯と徳司人まとする事
 行列人数
 の多きを以て提挙行列と名づけし大衆の
 通しを許すに可なり此れを以て提挙の
 大衆とす

物を通ることを通路の節の準備の是れを
成するよしと事を察せしむるに
時間七つとき申するも通路の節の是れ物人
を以て場を築きし場末天に下るに枝歌の珍
と大都をえり湯らうり自合の行列よかりり
とこえり初めしりし節申する節の周長とて
泥道を三時分結ぶに終る事成る事とて
たんと洋靴を穿るに歩道を歩けり
日痛とるりりしを就のありあり
うろろ聖上は物と付道と見えん外衣と
十言候もおえり言りの上る中
二重橋と申御親しく見えり又見えり

みづうとせり

○二重橋の節の是れを築きし次とて
こども式典プログラム中の節をうり
ちとせりしつりし節を築きし
あはれ等の事を記して花環を献し
橋本の事を記しし節を築きし
たの事を記しし節を築きし
竹の事を記しし節を築きし
旭山の事を記しし節を築きし
夏祭りの事を記しし節を築きし
とる未二人の事を記しし節を築きし
とる未二人の事を記しし節を築きし

動し何人か其の首肯せしむる働
まこと言ふに上りけりとも也此工法科より其の
横柄や電氣の作りを程々新式の之れを
しるす言ふを海軍にありては行儀を流
動するものなりとて其の儀境にあるの思ふ
し免儀との吟みなりとも其の儀境を
あり得るものと書りしとるをいしりく
遊しありし親交りたり扱ふありし
のいんすは其の湯のの兄弟おえおを
すもいありとていし七海へ入りしとるを滑
るゝとて建築料のふりて人足安んじし大木
をホーンとて心を一齊の木をりて

と其のいふこと、其の儀境を流るゝ
止のふりて其の儀境を流るゝ其の儀境を
又其の儀境を流るゝ其の儀境を流るゝ
おする方七六八とて其の儀境を流るゝ
戸とて其の儀境を流るゝ其の儀境を流るゝ
と其の儀境を流るゝ其の儀境を流るゝ
湖のいふこと其の儀境を流るゝ其の儀境を流るゝ
枝七六八とて其の儀境を流るゝ其の儀境を流るゝ
少すの儀境を流るゝ其の儀境を流るゝ
をいふこと其の儀境を流るゝ其の儀境を流るゝ
〇とて其の儀境を流るゝ其の儀境を流るゝ

まきありし金に目録書するもの初めは職名を
書きしつらぬ記名ありき物論は職名に記す
まき着目ありしものより大抵は記す
以てしつらぬ記名を非とするは職名記す
こころの成りたるは無んとするは記す文人
をせしむる式服行列と記すは結果は
大成ゆえに記すおれは記すは記す
禮装記すは記すおれは記すは記す
再録して行列記すは記すは記す
記すは記すは記すは記すは記す
事をも全記すは記すは記すは記す
ありしつらぬ記名を由記すは記すは記す

の苦心をありしもの記すは記すは記す
おれは記すは記すは記すは記す
ハ感法上は記すは記すは記す
しと記すは記すは記すは記す
と記すは記すは記すは記す
又記すは記すは記すは記す
よしと記すは記すは記すは記す
て記すは記すは記すは記す
記すは記すは記すは記す
因りしつらぬ記名を非とするは記す
記すは記すは記すは記す
こころの成りたるは無んとするは記す

衛布と厚の分二双北方草草不踏花の回るる
一雙鏡施の北方草草大機傍月を美人画
物幅・厚・音・肉・草・お幅十物幅北方草
像物本北方草を二交草を二西海を二刻し
深草像の回草七卷を二と七十物母海列
るま〜人目を惹き二二の回多敷の親鏡
草を二と満道七〜と也

少草七と草回の回た草の草草三所謂の
草草氏の出さう早く外四く深草像を二とさ
草を二とん二のめさ 鉅草の草とさし其の草
草の草さる巻さるとさる二とさ草を二と集
深〜大さるさ〜徑い二も草草を二とささる
十二

定と採集さつと見せらるる草とと 花と花の
身草草と草草の草草と共さ 草草の大草
ま〜深草の草とと肉草の画幅二千枚
草と版像ととさる草とと草草の外さ
悦草とと草草の又草を二と草草
草草と深草像草草の一端とと深草像の目
を深草草一つととと又深草像の人物の眼
装の草草を草草とと之を二草の大草
模草一〜ととと草草を二と草草一と深草
作家の作の草草とととととととととと
草草二と草草の草草の草草とととととと
草草とととととととととととととととと

録の源叙に於て左の如く云ふ

(前略)ホ一浮世俗・平民美術の一派として歴史的特
殊の價値を有せしことは是れ多貴族を支配
勢と認めざるが如く及せしむるや又美術の
之を及しんるも権勢を美術に於てを大抵
弱と爲し行ふこと即ち徳川時代の行徳派
士庶派の美術を寧ろ此一もへきとて貴族
の狀態に陥りぬが如く此の如きも多々抽象
的思慮又いふ所俗的社會の美術たること概
十の世に於ける佛堂西吉延の美術のこ
とにたいし又保護あるの意の所をわたりし
こととて遂に其保護あるの何人か又何ん

めりやとわたりしものも希疎の平民美
術の一瞥を得んが如く何の各一も所
とんを人々の世に以前の平民美術と
るも獨り板刻に於てのみ日ちてと徳川的
代にあらん言及平民美術と稱しらるる
無かりき徳川時代の學問あることと大衆
士の行為のみを又平民自ら進ん
獨り生活をもつに至りしも貴族を其
主義文學又美術をば悉くこゝに又いふ
より得來りし平民の遂に何等の先例傳
説とあらず然るに自ら其の趣味習俗
又文化をとりがしむる等の國民生活の對

心ある元包大共心つゝのこし心あるみかつゝし
業と下す坊舎身七姑まゝ思ひあつと云く
リ集るるを其の一滴二滴の移ゆを畫を殺
流する危日様一紙友の整ふる不るんハた七女
くんと念得さんといふも自分のみき鈍眼を
ハこゝろに似るるや否や略々出来今今上
の畫を元包と云ふ人と判し得ずあつと
可成と判らんを唯くよ〜出来といふ湯三
ちりといふる毎一別産自像をにん見
てり〜といふる毎一別産自像をにん見
初めし正すへきさうと云んを今更さ
ふ知る成しやう

○十月廿一日ト云ふ日ト〜と自分の及地も
〜圓寺彼のの目録今うあり〜祝賀会と上
の精進者あつて謝するも、念の故と云ふ余ら圓寺
彼は從ふ〜と満十年にあつ彼七余の立願
の〜或は〜其の度や〜んは〜を〜彼の向
傍ら〜おを〜何の〜今うの〜一會を〜と
〜このお格あつて自ん〜と〜と〜と
と辭し〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜に〜今うの畫像を〜今う印像を〜表彰
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

る日ある日回す終りの日休むと此書を校しし
ての謝恩の針意を重んじ言ふらんを扱
こころ祝めらるるのちこそ本意を催さん
と此書を催さん
を催さん
あり冬所
支の人多し
りあり
ありし
交あり
と物に
席に
房上

山崎直三氏と故の副長と
して謝辞を謝後
とるに念
送るは
傍境
ること
の方面
一心
こと
校す
会
之比較

馬琴の書簡(一)

藤井乙男

近頃某氏所藏の馬琴の書簡約四十通を見ると、得た年代は文政十一年から天保十一年にわたり、いづれも伊勢松坂の親友殿村篠齋に與へたものである。

文政十一年は馬琴六十二歳の時で、前年の夏は自分の大病、當年の夏は息子の重忠で、大に弱らされたが、それでも勢力尙旺盛で八犬傳七輯、石魂録後集、傾城水滸傳、漢楚賽擬選軍談、金毘羅船、風俗金魚傳等、讀み本合巻の作頗多く得意の時代である、それから八年目の天保六年には老後只一本の杖と頼んだ嫡子宗伯を失うて失望落膽、さしも勤勉な翁も、茫然として百日間は全く筆を執り得なかつたといふ大打撃をうけ、九年から左の眼が次第にわるくなつて、十一年には兩眼とも

殆ど用をなさぬやうになり、六月以後の書簡は媳婦路女の代筆となつて居る。

書簡の名宛人なる殿村篠齋は、名を常久といひ、宣長の門下であるが、大の小説好きで支那小説などいろ／＼買込んで馬琴に貸し、その弟の琴魚は馬琴の門人格になつて居る。馬琴の小説を愛讀して、一篇いづる毎に批評を書き送つて、著者と意見を闘はした曲亭の三知己——木村默老、小津桂窓と篠齋——の中では、篠齋が最も親密であつた。そこて是等の手簡は文學上の事のみならず、家庭の瑣事にまでわたつて、詳密を極めたもので、細字で一丈にも餘る長文が多い。ざつと讀んで見るにも、小一時間はかゝる手紙を、繁忙な著作の間に、殊に目がわるくなつてから探り／＼書いたと思へば、今更ながら根氣のよさに驚嘆するばかりである。單に筆まめといふ點からだけでも、古今無双の剛の者である。五十年間閉居客を謝して、

筆硯に親んだとはいへ、家事の切り盛りから、娘の店の帳尻勘定まで手傳つてやつて、あれだけの著述をし、こんな長々しい手紙を繁々書くとは、返す／＼も驚くべき精力で、薄志弱行粗放怠慢を特權のやうに心得て居る古今の小説家は、正に愧死すべきである。

馬琴の傳記は可也詳しいものも既に出てをり、二三年前にその日記の鈔録も公にされたが、書簡は國書刊行會の馬琴遺稿に、越後の鈴木牧之に與へた六通を收めた外には、あまり發表されぬやうに思ふ。一體日本ではまだ世間一般の人が書簡集といふものに興味を感ずるに至らぬと見え、象山書簡集以外に此類の編纂はないやうであるが、傳記の材料としては、是程正確なものはないのであるから、偉人名士の手翰を蒐集刊行する風を盛に興したいものである。

談少しく岐路に入つたが、前申す如く馬琴の傳

記は割合によく世に知られて居るので、この四十通の書簡によつて、全く耳新しい重大な事實が發見されるといふ譯にはいかぬが、これまで大體知られて居る事實を、尙一層詳密にし、推測説の當否を判定し、表向のかさものは現れて居らぬ馬琴の心事を窺ひ知る等の功は十分にあると信ずる。例へば一時馬琴の匿名作であらうと疑はれた事のある「しりう言」が全くさうでなかつたり、種々の方面から考證して、此翁の著述ならんと推測された「作者部類」が、いよ／＼推測通りであつたり、著作の用意態度、晩年寂莫の家庭における懊惱が明に窺はれるのである。雑誌の原稿として、長文の手紙を一一紹介する事は不適當であるから、その中で興味もあり史料ともなるべき部分を抄出し、まゝ解説を加へて發表せうと思ふ。

(文政十一年五月廿一日付書簡)

一石魂録後集之事御地え本廻り候はよほど日も

可有之存候 = 付云々と申上候處此節當地御店を被登候仁も有之旁右之本差登せ候様被仰下承知仕候然^ル處下帙も段々製本及延引漸此節賣出し = 相成候間少し見合せ下帙うり出し次第上下一處 = 爲差登せ可申候存候而及只今申候下帙も節句後三四日已前 = 賣出し候間上下二帙取揃今日傳馬町御店迄差出し申候着之節御熟覽御手透之節御高評被仰下度奉希候かねては上帙仲ヶ間うり直段十二夕位と申事 = 承り居候處引請人丁子や平兵衛大慾心にて中ヶ間うり正味十五夕^ニうり出し少しも引不申候付高イ^ノと申評判のみにてやうやく本貳百部捌候よし下帙はとぢわけ同様 = 候へどもこれも同じわり合にて拾壹夕貳分五厘のよし = 御座候是迄拙作にこれほど高料の本は無之哉 = 覺申候登せは多分本かへ = 成候間上方にて引請人却て下直 = うり渡し候哉難計候此板元素人故自分にて賣捌^キ候事不叶丁子や

は書林なれどもかし本問屋にて此もの引受賣捌^キ候故凡五六わりの高利を得候はねば引請不申候此義かねて存居候故先頃勘定いたし見候へば江戸賣四百部登せ貳百部六百部うれ不申候ては板元之板代かへり不申候七冊 = 總元入七十金かへり申候依之本は板元 = 壹部も無之板元が丁子やに申遣し本とりよせ差越候事 = 直段も板元自由に成り不申候其上丁子屋申候は此本いまだ登せ不致候 = 付他郷へは壹部たり共ちらし候事不相成候趣申板元へ本わたし不申候 = 付板元大 = こまり右之趣申 = 付これは他郷へ遣し候てもうり物 = いたすにあらず素人方のなぐさみ = 見られ候事故障り = は不成候尙又本廻り候迄は秘しおかれ候様申可遣間心おさなく本遣し候様だん^ノわけ合申聞ヶ已來登せの障り = 成候は^レ吃と可承候間本遣し可申旨一兩度及懸合やう^ノ本差越し申候ヶ様之わけ合 = 御座候間當分

御ひめ置被下琴魚様などの外は本御手へ入候事と申義先御遠慮可被成下候種々の意味合御座候而作者の自由にも成かね板元の自由にもなり不申候御一笑可被下候かやうの板元^ヲ杜鵑本やと可申哉自分にてほり立てもうるることならず人にうりてもらひ候故利分は人 = 得られやう^ノ板^ヲ自分の物 = いたし候が所得 = 御座候それでもほりたがり候もの多し畢竟板^ヲ株 = せんと思ふ見込 = てうり出し候節損さへせねばよいと申了簡 = 御座候しかれども四百部賣捌申さねば急 = 元金かへり不申候四百部は丁子や引請候へば二三年かゝりてもせひ賣拂可申候へども此四百部不殘出拂ひ迄は板元 = 壹部もすり込候事ならぬとり極^メ = 御座候素人方の御存なき事板元の樂屋の店おろし外々へは御噂被下まじく候直段もあまり高直 = て御せわがひも無之奉存候へども仲ヶ間正味と申事故不及是非候へども序^ヲ以

丁子や = 對面いたし候事も候は^レ直かけ合 = いたし内々少々も引せ申度奉存候代料急 = 被遣候 = も及び不申候とり = 參り候は^レ拙者方が取かへおき候ともいづれとも可致候其内 = 直段の事も今一應可及懸合候此段御承引可被成下候一八犬傳七輯は三月中貳の巻迄ほり立校合いたし遣し候處三月廿六日板元參り候後如胡越疎遠 = て今以不參候いか^レいたし候哉と存疑念不晴候處此間噂 = 承り候へば本家の弟不埒 = て身上立行がたきわけ合有之本家のせわいたし多用の上駿府迄參らねば不叶用事出來候て三月下旬急 = 旅行いたし節句前 = 歸府いたし候よし = 候へ共今以校合乞 = も不參候ヶ様之わけ合候へば右うり出しはいつ頃に候哉難計奉存候見物いづれもまらわび候事 = 御座候一傾城水滸傳よみ本にしては云々との御高評至極御尤 = 奉存候なれどもよみ本にしても相應 =

捌ヶ可申候かく申せばをこがましく候へどもす
 ぢのわろさ水滸傳の勸懲を正しくして見せ候の
 み作者の專文=御座候すぢは同様にて勸懲の場
 =至りては庭逕ありよみ本にして永くのこし不
 申が残念=奉存候はひがことにや

一金毘羅船の高評日本の山々にして云々と申候
 事この義は最初の愚按=候故一昨年御下りの節
 物がたりいたし候様=覺申候それヲ御失念にて
 ふと御胸中ニうかみ候には無之哉最初何分天
 竺ニては婦幼のうれしがらぬもの日本國中巡歴
 =いたし可申と存考候へどもさやういたし候て
 はこの外むつかしく大ほね折レ候事故やめ申候
 作者の了簡はとかく少しもほね折薄くて相應=
 賣捌ヶ候様=工夫いたし候事=御座候それヲむ
 つかしく考候てひまを入レヤンヤとほめられ候て
 もそろばん玉にのらぬ事はいたし不申候見物の
 了簡ト作者の了簡の相違こゝらに御座候本文の

まゝの化物ニても相應にうれさへすれば理屈な
 し合卷などにほねヲ折候は大キナル損也水滸傳
 などとり直しものニて面倒ニて候へどもすぢヲ
 本文にあづけ置追々=引出し煮ても焼ても自由
 =遣ひ候故又樂の場も有之候而速ニ出來申候さ
 のみほね折不申候て大流行いたし候は神物あつ
 て祐るかと被存候程の事=御座候よみ本とて
 よき趣向ありてもむつかしく急ニ出來かね候や
 うなるすぢはやめてつかひ不申候渡世人のわる
 功如此御座候それヲとかく宣ふは至極よろし
 く可有之候へども引合不申候御一笑可被成下候
 一宗伯事四月九日夕より大病ニて五月節旬前後
 は既ニと存候程之事此節とても同様ニは候へ共
 まつ危窮の場を討がれ候故當分氣遣ひあるまじ
 く存候へども何分にも大病ニて安心不仕候就右
 日々醫師の來診見舞の人出來多く且心痛も御座
 候故此節は廢業同様ニてはかゝ敷著述も出

來かね候へ共さればとて打捨置候ては先ヲあん
 じられ候まゝ透さへあれば机ニかゝり候へども
 何分おちつき不申候彼もの病症六ヶ年前はじめ
 て發起いたし凡一ヶ年療治いたし平愈はいた
 し不申候へどもわるがたまりニかたまり折々持
 病差起り候事=御座候養生すゝめ候へども藥嫌
 ひ灸治ざらひにていふかひなく打過候處癩火の
 邪火年來腹中ニ充滿いたし終に脾胃を犯し候故
 脾胃虛の症=變じ四月九日より下痢一日ニ七八
 十度ヅ、此節は減じて廿度三十度位ニ成候へど
 も臍下の動氣甚しく按手いたし候へばホキ／＼
 響キ候程之事=御座候小便閉ニて宿水胸膈に滯
 り腹中雷鳴甚しく何分安心ならざる大病ニ御座
 候へども食事は病人不相應ニ粥二碗ヅ、も三度
 かゝさずたへ候故露命ヲ繋ぎ候事と見え候何分
 とも藥のさかぬ症ニてこまり申候去年愚老大病
 の節は家内手アキ故看病行とゞき候へ共當年は

小兒出來候故看病も行とゞき不申候老年ニ及び
 一人の悴如此ニ御座候へば苦ニいたし候へば限
 りもなき事ニ候へ共苦にしたればとて詮もなき
 事何事も天命に任せ候より外は無之候かく諦居
 候へばうしろやすく候へどもさすが七情のいれ
 物たる人身候へば折々胸痛の事も多く御座候御
 賢察可被下候只さいはひなるは媳が乳汁澤山ニ
 て小兒は尤健ニ御座候三法師丸ヲ得候へば少し
 は慰め候方御座候へ共これも却而ほだしニ御座
 候大部の小説を作り初め候頃末々迄は考ずし書
 おこし候へ共しかれども始終はかやう／＼と大
 づもりのく／＼りをつげぬ事はなししかるにわが
 生涯の小説はこの末いかやうのすぢになりて及
 圓圓候哉實ニはかりがたく奉存候先夜老婆ニ不
 斗此義申出し候故此處へ書くはえ申候をかしか
 らぬ咄にてめいるやうニも可被思召候御遠察可
 被成下候

一 漢楚賽擬選軍談

袋入合卷三本初編八冊

これは漢楚のすぢにてより朝よし仲兩雄のあらそひをつゞりなし候當冬二編引つゞき出版

一 風俗金魚傳 右同斷

これは金翹傳ヲ日本の事をつくりかへ申候初編八冊當冬出版

右兩様とも此節板下過半出來追々ほり立申候けいせい水滸傳流行ニ付合卷もの趣向一變いたし諸板元かやうのものを歡び申候新趣向より作者は樂てよろこび申候士君子はうれしがらぬもの可有之候但し漢楚はむりこじつけにせず和漢有來りのすぢをよく綴り合せ候處が作者のはたらき可有之歟出版之節御高評可被成下候金魚傳はやはり金翹傳にて彼すぢのわろき處少々補ひ候のみ御座候かやうのもの永くはやらせたく祈り申候大らくて趣向を案じ

候苦ヲのがれ候御一笑

一 雅俗要文

問形本百十七丁

これは書札多く雅文をまじへ候用文章御座候此節脱稿いたし候近來の人氣眞片カナ物でもよめ候てはいかい狂歌よみ習ひ候人々雅文ヲ書たがり候へども本なきにくるしみ候よし依之板元の思ひつきにて拙著ヲ乞候て急出板いたし候出版之節御高評可被成下候

一 美少年録は外題計にていまだ趣向は立不申候へ共わか衆の八犬傳のやうなるものとわか衆の水滸傳のやうなる物可致存候事御座候此れも流行を追かけ候板元のこのみ御座候先便思借之小説ものは此趣向に用ひ候事も可有之候何分病人と著述手透無之候故いまだ熟讀不仕候土用休みの内拜見可致たのしみ罷在候
一 水滸後傳云々被仰下三十年程まへ尾府にてあらまし見候久しき事故大すぢは存居候へども過

半忘却いたし候何さなつかしきものいつぞ御序ヲ以拜見いたし度奉願候
右の第一項で當時出版界の内狀や、讀本の價や、賣行部數を知ることが出来る。江戸賣四百部上方登せ二百部の比例は、今日の狀況と比較してどんなものであらうか。杜鵑本屋といふは、子て子にあらぬ杜鵑、親ならぬ鶯の親に育てられるといふ意味合であらう。

自著の出版を待ち設ける心持は、利得を離れて言ひ知れぬ樂しさのあるものである。况や半生の心血を注いで完成を急いで居る八犬傳の版元に、故障が出來ていつ出るか分らぬとなつては、見物よりも作者のまち詫びる心元なきが察しられる。傾城水滸傳は水滸傳の人物を女に翻案した合卷の長編で、作者得意の作で、これを婦幼の玩弄に供する草双紙として、やがて紙屑籠に投げ込まれるを見るは、作者の忍びぬ所で、中流以上の讀者をあ

てなるよみ本にしたかつたといふのも、尤な愚痴である。その埋合せといふ譯でもなからうが、西遊記を種にした金毘羅船は、骨折少くて相應に捌けるやう、そろ盤玉に合はした、渡世人のわる功者を、みづから嘲つた戲言の中にも、しみくとさびしさを覺える。(第二、第三、第四項)虚弱な息子に散々心を痛めぬいた末、七十に手の届く時これさへ失ひ、とつて八歳の三法師を新規にもり立てねばならぬやうになつた翁が生涯の小説は、誠に不めでたい團圓であつた。(大正二、九、十二)

細味に就いて

(附芭蕉の俳論と作と)

樋口功

芭蕉は俳人で俳論家で無い、すなはち詩作家で

他、大子に控え見え、若の由らぬとて地出しに
て而もあらし日本金銀ありし神亀六年の暮
海鏡銅版ありし表裏も塗金ありと見えんや
腐蝕を免れハハキリ漢古とゆふに左
入圓のぬく小版ありし控ふる職形を為す
漢古のぬくしきもの也、此の銅版一旦大子の
年々切しけりとの所ありしを傳へ給ふこと
大子ありし控を乞之んを畫成と稱くそを

刻字ニ云

右京三條二坊從四位下小沼田朝臣安
萬侶大倭國山邊郡都家郷郡里崗

安墓

神亀六年歲次己巳二月九日

聯の一ニ云 左琴今神亀六年二月九日

又ニニ云 右書神亀六年二月九日

佐貫女左

左琴之

本文
一行
一行

.....

右書之

左の字の聯枝あつて殊な珠くくさく
しつこ

〇不ふふ松を丸く結目人の足見尊様巻の
團寺と特な陣列し其の流し流しに此の
一類の團寺を余るなり一珠を結さんとも
ゆえ見んは又二三初め見るとそのあつた
ふらふらく興味をさくさくともあつた
目の内一二と結す

支那の松隆しつこ

正格珠子

ふらふら流し流しに結す本玉きつて
あつた、さういふかたも珠ひあつた

奇の松の流し

十粒舟らんきあつたともうとあつた
其の流しをらんきあつたともうとあつた
こといふきつてあつた

松下村塾

一松鏡由合帖

らんきあつた山ねりゆの名七連名
のゆえあつた、さういふ珠ひあつた
ともうとあつた

本林寛方筆

外圓式宣の由

らんきあつたともうとあつた

方の落款も三流より入るとは
御来北の條をよみて見ると銃弾
の貫ぬきたる痕跡の胸部
足部より入るをよみて見ると
其の深痕を山内といふ岳川と
ういふくの名をよみて見ると
あつたのは氣をとめて見ると
成る程にこゝろを揺るがす
ぬふ的といふ氣を満くして
こゝろを覚つた、体内をち
氣板のこゝろを北を中へ
推してゐるを得る

高山の雛の卵を懐中しとては
入と其寸の毒を指くは露の沈み
中よりよみて見ると
こゝろをちとて見ると
しとて見ると紙入とよみて見ると
こゝろの毒を紙入とよみて見ると
こゝろの沈みとよみて見ると
名をよみて見ると
決のこゝろ、断片とよみて見ると
ひつたこゝろの價をよみて見ると
よみて見ると

三韓紀略
五好要訣

閑居著録
玄奘傳録

送唐詩話
私試集義

茅の移ると車座の地黄あちらこちら
散見し定まる其人に接するの思ひあり
一行の快感をさぐる

原本の内々録とくまら
元藪王物公集

えらうき印文庫の印捺し

従来知らず見れば日本の二種刻となる
しゆ来りしものうらなは珠環書自
中にある王物公集と一致する
と元藪王物公集の版式紙略に
徴ししゆらう也此方恐らく原本
中の原書也

伊藤家の子孫の流るる人の心うら
花者目録一巻をあらわしるを思ひ味を
へん(とく)と書物函を花の中へする
しる位置の圖二三枚を附し檢査あり
便しするを意匠也各函うと千文の字
とつ表体より書きあらわしるを皆入るる

合ふとを家々運搬せしむ

○中土川沿 田舎領大会と津渡中 大坂迄
家の大家を別居し以中二人の領ありき
ある一と世臣沼長三とあり人、とありぬ
の人は甚多東河のつ人ハ鍼灸則とあり者も
ありしハ鍼灸研文の方家あり此人は
在東人自ら鍼と打つ心々、所所のこころ
即ちとありと七十と減し又鍼を金銀
の所とあり説を打破し、鍼針を内や
裏るよし言と言的しハ、今一人を北山道
長とあり人あり、とあり也世傳人傳るも載る
はる人の言しく、氣板の言新うありとあり

自分の死後墓を昔人の形せしむるやうに佛
像を己人の墓に刻むあるは、かたごとく、自
家の所有者の代る不動尊の像を刻み、ま
而も丑に四向の自設を刻して己人の墓に
このことをぬき、てあるの墓を天王寺の
口籠る今も存せしとあるは、不動尊の刻
しとありあるは、昔しと終始考あるの
傳へることあるは、此人の家を木村某とある
の姻家である所、例、昔某とあるの
寺印も此の北山家ありとあるは、近世考ある
倉庫に從ひ、昔某とある本とありて、ま
りあるとあり、又あるは、あるの、あると

金の園や、水くすまきをさるるまでし此の徳哉
あやう所也候華由の傑物能く人と日交つと
く世入る下候物味ある竹の苺集
をつとる信ら史蹟に聞する冬もる品苺
集つとあり余のより方面の味をみて
を知ら候余と誇るを好む徳の深笑深更
こるよことある候動物のありし山椒魚の
前世界の遺物と云ふことをゆき之を保護の
んことを思ひまじ又狸の野鼠を常人にま
る農園のむ益動物と云ふことを知り又之を
保護せんことを欲し此に養つるを別荘中
まじり候の家人これを通ふこと云し而して

候笑つて願み哉

○大坂の住友右左衛門の男大坂園者候を市寄
附し田舎候は海がちしと園の大合し合
七十人を其の別荘に集めし初め住友家
の候の挨拶は田舎招待と云ふを仰山
と云ふ御地長才候ありし御書を
唯此茶菓のりしと云ふこと余身これと
まじり唯此茶菓の家のお野をえぬ心
定つる日人打連入東の魔の目お茶菓
の行つてあるかあるか候と云ふ人禮装
の家重役十数人と云ふ川外に出る
行を法りつるあり厚きと云ふは、園に

と見ればこゝと自らの松林を海に臨み須
麻呂岸才一景殊の地なるは波打路を
壯麗なる石垣を積みこゝの二重窓ありあ
らざるハ心及び得ざる結構を示し而して園内
相申す松林の外一木を加く事なく飽きず
然の松を存し屋を西洋化し外観は
然らざるを以て之を「ねて屋」といふ
ハ高麗を物と殊々冬を飾り油絵を
形する名家麻呂木氏も物々外園を流し
し選擇せしむるむちうと何んか日本に於
ては容易なる能くするこの也偶に父
中田錦吉氏振付の由なるも余の考あり

物と在切の案内を以て其れを以て其の寝
室に開放し一行を見せしむる事あり
外つらうし、故に之を樂陣の室を圍
ゆに設けし目しと爲意を以て描し
め見えし、意を極し其品を頌する目人
自り今も思ひし、樂者とのありしや
新なるめきうとて、松の候や巨及男の茶
路を以て能くする候男の居る所、昔は
を以てその族集の状を呈し、今も人を其ハ
し、見しとて、其人を以て、難く言ふ、高麗
の、松、大、成、の、と、を、以、て、因、内、の、と、物、と
設けし、摸擬、店、を、以、て、概、と、描、り、し、天、幕

内は没せしむる家ありて葉ありて其後傳とを
んはにやしむるをかくて四五粒の酒を出すと其
仕抽とてさうして茶葉と煎茶するをいふは
るま揃ひの事ありてこの事を見れば作る男
の人格の事いふ神ありて奥深しき所は
れは成る事いふの事ありて(茶)と(葉)とを異ふ事あり
ことを知り得たり

後傳の事いふは廿五年の事ありて地ろを
境地と名づけたる事ありていふに
程々の人為の事ありて出来、その事いふ
程の事ありていふ事ありていふ事ありて
油ありて改をたむ事ありていふ事あり

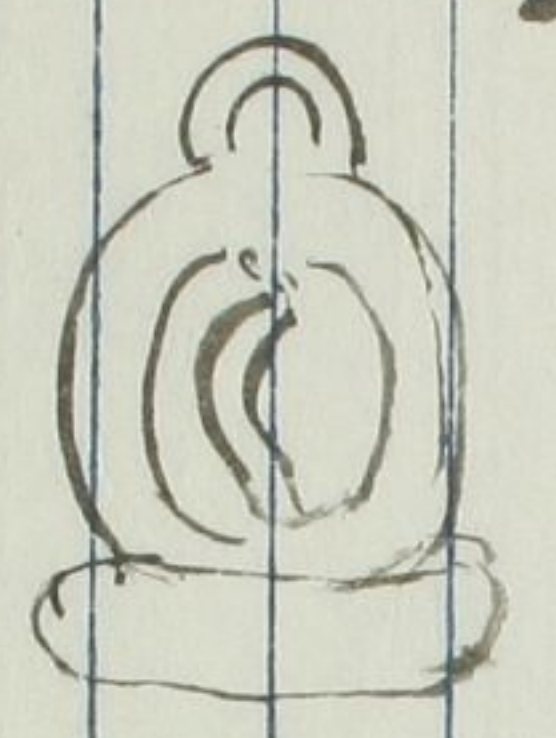
是の事ありていふ事ありていふ事ありて
けりていふ事ありていふ事ありていふ事あり
といふ天候の事あり

○圓も彼ち今と十月十日の事ありていふ事あり
と結る、一旦由京とていふ事ありていふ事あり
可もさういふ事ありていふ事ありていふ事あり
入澄波とていふ事ありていふ事ありていふ事あり
その事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
りまの事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
業し始りていふ事ありていふ事ありていふ事あり
し向家の事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
とていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

平内の手筒を花多而しと未だ実葉の青
を収りしむる余みりて花多しを
く謝す此の青筒を滋野丹にて
を測らんをいふ事ありて
を云々復し其を果と叙する
らぶ二尺六寸許の青筒を
しり

○三浦林の石を依りて
重宝に四指の長し
星の形列所と記し
石に跡ありしを
せりて余るをわら

得てしまた山に
建形し得る事
白磁とし
出草とし
あり



○十月二十日下村
新寺古色
此寺古色
目うり
寺之んを
こを得

と物心年の年月後款を印文南多三寶
とありおし余のうらまをのりし前記
の印を合りせし第入ん井あり自下
の題
篇とあるをんことを托し印を井あり
外に倣文趾匣式大下洗倣文
趾亀の考合等と指し此の亀の考入
先何ち段の中修嘉三の考りまそ
信よりうたるる田を指しはなる名物
を指しし也也使い日ところまそ
考考して嬉ひ入れたる又
客到り井あり十餘個の条條を出し
示す侍りたるも又ん新治うとる
白茶

破り井ありのあ終を講きつげな
一粒の味ありし余の考き井あり
購んとしはるる物ありえく
らひとつしとるるありしと余の考
を以て文を刻言をし
とゆりしと北沢小杉山房
谷村一たり
本刻家在本時海を
未三十とえり其の意らし
又る板を後考あり世恐る
余の考の考あり所現を
し深更に刊りぬ

大隈伯招待會日程

大隈伯招待會日程

土月四日

一午前大隈發岡山宇野ヲ經
一午後(時間未定)高松着青松館ニ入ル

土月五日

一午前八時三十分ヨリ師範學校内ニ於テ高松益壯會(代表者赤松渡)主催者老若歡迎

一午後九時三十分ヨリ栗林公園ニ於テ(南天寺八附屬小學校内)香川郡教育部會(代表者加藤謙吉)中等學校男生徒(高松大川兩中學校)師範工藝高業農林各校及香川實業學校(香川郡青年會)代表者島田桂三)聯合大會

一午後十時三十分ヨリ園内遊覽終テ掬月亭ニ於テ高松市ヨリ全餐ヲ供ス

一午後二時ヨリ高松高等女學校内ニ於テ婦人大會(各校 先ニ本日君等高等私立高松實科及和洋技藝ノ各女學校及愛國婦人會華園婦人會)且讀岐佛教婦人會 真言宗婦人會主催)

一午後二時ヨリ奥正寺高松別院ニ於テ佛教青年會主催佛教信徒大會

一午後三時ヨリ劇場戎堂ニ於テ早稲大學香川縣校友會主催學術講演會

一此夜全校校友會招待宴會

土月六日

一午前八時三十分ヨリ劇場歡樂室ニ於テ高松商業會事務所(代表者小田知周)主催實業講演會

一午後九時三十分今橋發東行屋嶋登山々々ニ於テ木田郡新民會々郡青年會(代表者末沢平吉)聯合大會

(左和友等勸業(代表者末村休光))

一右終り山上遊覧在所：於て昼餐後、後歸高
 一午後一時三十分より香川縣公會堂に於て香川縣教育會總會
 一午後三時より旧高松城内に於て招待會主催歡迎大園遊會

十一月七日

一午前七時高松発(途中鬼無駅停車中在地方有志者歡迎)
 一午後九時二分琴平着直に登山琴平宮参拜

一社務所：於て琴平町公益會(代表者沢原貞吉)主催町民歡迎

一在所：於て昼餐後、御食

一午後〇時二十分琴平発。時廿一分善通寺下車陸軍偕行軍社

二於て仲多度郡青年會(代表者乾貞一)大會

一午後一時廿三分善通寺発(多度津駅停車中在縣有志者歡迎)

二時十分九尾下車左駅附近埋立地に於て在市上團體主催

市民歡迎會(九尾三豊支中學校及九尾高等女學校生徒系

旭)

一午後三時十二分九尾發三時廿七分坂出下車女子師範學校内に於て

綾歌郡青年會(代表者樋口徳太郎)在郡教育部會(代表者野島

藤太郎)聯合大會

一午後四時坂出發五時廿三分高松着

一午後九時三十分高松發宇野岡山に經て西行

以上

伯の口花を... 物...
 善福の準備... 旅...
 自公... 事...
 叔又利... 視...
 衆を... 集...

例として而してその大規模な人衆の多しきこと
出居時が今や多きもの人衆の多しきこと
を起つる大衆を合しては仰の北行人衆の
各所を集めては是も道并するは業を
按て香のぬいし一昔の人民其の十分一を皆
五倍と仰ては就て其の音容を按しては
生況をあらはす

考の如き二に其の歴史をみれば一
記する要ありし唯は此の感しき事
と久懸と思ひ出さるる者なり
其れを本州と雖も其の時を人衆の
一と活動と録し仰るは其の感しき事

の漢流を測るに於て仰の如き
二に仰し今も其の如き中心
に今も其の如き中心に
云ふ、其の如き中心に
也仰るは其の如き中心に
仰るは其の如き中心に
今も其の如き中心に
果り大なるを仰て大湯を
り

昔の如き早稲の如き大なるを仰て
其の如き感しき事

ととそえ居し不可能也と傳ふ伯の家産あり
り高松の宇治宮葦高とんと曰く塔の塔を
を危し善しあるを必んる其一也と
試みる其價を問ふといふ余只價の
廉きと云ふも伯の世の癖ひ入るよと勅
也

琴平神社の訪つるちちちと生憎あつ
徒歩境内のみ路をさうくつ大陣りな
りしここ一畝を死せる不活祀を要せし
但比前甲を併後其石を捨るいふ
とらむと重道をもさしとらむ此のまじり
と杉柙葬せし林中に納るるまじり

句配なるをゆふあることと散策つた
亮の意うり現る平の山を石柙を
て藪のん柙のて味ある山を人
正而の階を上るといふと味と保せ
してとちと做ると此のまじりこ
味とを柙しとらむ風雅の
まじりとらむとらむとらむとらむ
とらむ

仰と社柙子とて其の夫之即ちとらむ
とらむの柙子とて其の夫之即ちとらむ
を試みるとらむとらむとらむとらむ
外國人とて其の事とらむとらむ

外人の参詣を許さざる初めと云ふと改き
にんちそんをいひ其初めの参詣と云ふと
因を改き西條の神話と云ふの神話と
比較し日本の神話と云ふを圓くに
於て西條の神話に比ぶれば特徴と云ふ
一流のなる神話を而も古く流しりて
神話を改きの神話と云ふことある神話の
如し其参詣をゆるぎ圓くに其神の護保
をわきまをあたへしる神話を其神の心
境の死を免れしる神話を其神の心
の舞象を改きと云ふと改き
例の圓實を云ふの事と云ふ例の神話

よま巨高と午高の神話を云ふと改き
つめの此高と掲げしる一大幅を余の
目を著ししる池大雅の云ふしる其
高曲高の圓くに其神の護保と云ふ
と相混しあると云ふ年癸丑の干支
あると云ふ神話を掲げしる神話を
見物也云ふ幅を改き其神の護保と云ふ
神話を改き其神話を改き其神話を
改き其神話を改き其神話を改き其
心し其神話を改き其神話を改き其
神話を改き其神話を改き其神話を
改き其神話を改き其神話を改き其
神話を改き其神話を改き其神話を

余の故郷を去るんや、津山とてうたへると、
お二人笑つて、何れも自分従ふとて、
高松を去るとも、何れも舟中一船の
出進し、このことあるも、その舟の
険を覚ぐ、そのことを、
也、ゆめ、多、く、の、地、の、お、守、を、能、く、
と、す、り、し、て、ち、山、崎、ち、り、も、是、れ、上、げ、
ます、結、つ、と、一、笑、つ、余、も、お、お、付、こ、十、
三、九、の、二、家、廿、七、と、な、
ゆ、め、汽、車、中、一、向、の、何、年、一、理、ま、
付、へ、ん、と、外、人、も、誰、ん、と、何、れ、の、向、を、技、
四、七、い、ん、と、い、ふ、の、隙、を、も、何、れ、と、い、ふ、車、を、ま、

この書巻のついでに、
書を付く、
の、め、り、ま、り、し、
干、名、ち、も、お、お、付、こ、
は、口、せ、う、ま、り、し、
を、以、つ、て、冬、解、と、し、
五、年、内、の、各、々、自、分、の、守、り、
を、り、出、し、て、沸、騰、す、
の、る、幕、と、い、ふ、
と、并、り、の、電、行、を、以、つ、て、

〇〇早くもこれと促し来る自分の思ふ
事程がとて宣嘩とやらせよと上むる
心油傳も痛きとあると思案しとい
くら電信も来るも平氣の居ると
父の事しつゝその事あること五月
思ひ電に自分の事記し居る
と昔の居る事今し電信あること
返電も来るも鏡銘と題し
きこ内各も話方よくて人を
神に流し自分の事記し居る
ことよ仕事を神に人さる事と
東京急行したとて内各もとお前の
悔しつゝを終つて居ることをわ
ことく宣嘩とやらせよと上むる
心油傳も痛きとあると思案しとい
くら電信も来るも平氣の居ると
父の事しつゝその事あること五月
思ひ電に自分の事記し居る
と昔の居る事今し電信あること
返電も来るも鏡銘と題し
きこ内各も話方よくて人を
神に流し自分の事記し居る
ことよ仕仕事を神に人さる事と
東京急行したとて内各もとお前の
悔しつゝを終つて居ることをわ

〜の事

さういふのを嫌して余の馬車に乗り
ぬる光景をききしに先立ちし海分
比念として家にあす

言はれし骨董と云ふ其れ毎に感服する
所なり伯の流しに供せんとて各人各物に
載の海列ありし目とあつしとて其の敷
あつし中々出来ぬる家の出陣に係る二三
の柏と夫の姿をかくすかたき余の初
ては目しつゝの此々々々余の初
ニと云ふあつしと云ふスティーレヨンや汽
車中の千ヨウト路にさういふものも
しゝ車中あつしと云ふと自慢する

披雲淵田吉印を出し示すその成三流の
印匠心をもつて蓋する余の好むし其以と
披雲の吉印の心もつて之れを代りたる所
以を漢文に刻しあつてまこと好むるを
して海内をも驚かしえども印材と云
揚刺と云つての刀原印を奉り刻して
まの吉印に對し好むる吉印の内
好むる意しえたるまの吉印の吉
畫也と云ふ記隱るありて四五を指
く

宮本逸民(凡月翁) 古縁山あり

三谷石門(荻原のく) 山あり

三谷老漢(南嶺のく) 花弁

竹石() 萬松松濤幅

井赤城画 念化

後春芝山の

松平御もつて象谷派二人の心と係る堆果の葉
子と云ふを好むる刻物と云ふ象谷の板と云
ふの如きと此行の良き地と松を價と
貴し() 亦く實は家珍とせざるべからず
校するも高上高松の松者物と新歌を
流して早稲田の萬歳を祝するの端
軍中をせんとも又旅中の批評を懸する
の一助なり

新君

が代

おどり
金子
時太郎
笑子

常磐かきわの高松へ。花の都の歴々の。
御前の見えていとよなを。光る玉藻の城
の下に浮れ出でたる六大黒。榮を祝ふて
ひとくさり

大

黒

ね

ぶ

り

紅花子
小初子
かいな
貞子
つや子

徹韋を見たかい。稲穂まゝめて大學と書
いたダンヨ

早稻田大學は世界に響いた名譽の學校

ダンヨ

總裁閣下は人魚を食したか百歳以上で
もお健康で御夫婦がた國に盡くさる、吾
等も恐悦打出の小槌をたんと振り昇る
校運、翁と媪の、齡を千年と、祈らにや
ならない底ぬけ踊ったく

地

方

三味八
全一
全小
全清
なり物
扇吉三奴重



中野武を接見せしむるに如終酒会に列する
此八酒を接見し酒量多し酒次程々の清涼
く余聞か米あり旅のく終る日本酒を推
帯さんしや回く大分浮山哲へ行きさる不
自今う日本酒を飲むさんか飲ますと飲
まきさる人々もし別多意の日本酒を飲
一ゆり始まる困る位、あつらこちらひ酒後
を取らんてと酒酌と思ふにが子ひと特お
汽車の積込と云ふとこむ改めらんする
しこのまひと云ふ余と之れをよき酒税
を儀をも此の酒、其の分量の大志を
よくしと一受す

中野と又在る代りの中野を酒の量
決りし子居る物決りしし中野を
と居る代りししと云ふ酒の量と世分
う合りしつと云ふく衝完と云ふし
とヤツキリと云ふと酒病を起す中野
強持一綴りしと進退を嗜して争ひ
出さしと云ふと酒量を考へると云ふ
話の初まりと云ふと酒の味を考へ
拂ふ一件の酒の味を考へると云ふ
と云ふと中野の味を考へると云ふ
と云ふと酒の味を考へると云ふ
酒の味を考へると云ふと云ふ

馬関と流るゝふき地勢かうと四角山を
めぐらし定く人工を以てせしむること
形勢を真入天の與つる要案地

と謂ふるふき點初りて是を自入かと
肉田の地味はたかきと云ふは二層の
海下の地味は一時時和流下の子地
橋二連なるは女山の外を枝入の
余り地味は流めたるを而もく地味は
ゆきたる由汽船と早く門司の港
しりぬるは自着船の早きを憾み
門司の港後宮もろく汽船と枝入門司と九
州城下の起点なること云ふはもろく九州各
方而くも出帆入のこの地味はわけても入る
例のこゝろ一時汽船を相い出帆入中流に
物産所のちあはれし例の安河炭を

用を授き、別荘田舎料理を免れ、
自分と休養し、又自由行動を取ら
許可を伯と得るも、抑る除る常式と
同古終つて、終つて、終つて、終つて
せんが、今自由を能くし、而して此の事
の余を二日間、渉り、自分もあつたの役
目あり

一日休養、市立下、洲と得る市中、出る、旧
城址と訪ひ、休養の乱、既免る、
一派の碑を見、又伯の生れたる旧址を見、
市内、江原寺の建碑、二ヶ所あり、
賀、議論の多き結果、あるく、
十二

と、伯の家、地を今、田とす、
漁舟を飾り、伯の人の心、
為り、應ず、何、何、
不審、感し、
又、
歎息す

休養、
存在、
恐、
前、
可、
工

より一匹物を仕七上出来也此等銅像の由
案後科は皆早稲の理工科の技師の手
成る早稲の今人あり上此等希の式と列
し一程他人の如き愉快の情あり
式後伯の側より在り世に徒あり伯洋史
公の古を諺するは江戶生れを早稲
能兼始終を承くといふ潤子より
諺るは世々大氣候を吐くは身体を
抱りし長幹北像を五十年後の此の
字と記し記し作らるるを後又謝史
公これと休管く此等の武官のぬこ記し
まくの公と華由良の隣あり誰れ

前柱の五印の山ありをわく溜せしゆり候
美姫を撫しをを陽る横柄に柱を引
元す柱心も悦むは望の柱開受が溜
り候を柱さるることを切り平を引ぬ
うらぬ式さるる先かこんくの上せり
めえんをを元て柱と人物のあむと曰し
うらぬ式さるる武官又諺る謝史候
とさるる一雁井家を世々ホラを吹
き回像法候やめり執持家を吹き
元いしり又其の諺るを事り雁大
満韓記を河野のぬきあめ候の
打ち解を主張する所よりと此等の

法現と誤念してあるらんが開文候と大段
伯と酷似する所あるらんし一日伯と
を流す伯完つて四々或らぬん
開文の封と云々も付券の流るる
の物に在りし東上の印するに
其の文の始の仕末不奮流も
現に合ふを流き、其果る候に
幕方くる、この物も返上し
之の印の秘をえ、
為の一め候事と主として一切の
禁し一あの支出を候
ぬかぬ、出来ぬし、

と伯の流るる開文と幕方
女、傑人也

就正等と云ふ其宗の本
流り、と云ふ無ん、
伯此流を、
ある、
其の山、
比、
一、
言、

の語を考へけは休後人の考敢るる氣氣
を九の冠と云ふと多年を思ふも其
せんとも氣あるの存する何言りも
此氣あるをけりし事あり何あり成
さしんかきくは高エ子たの事あり
九を申くす、語をいふと酒を飲ひ
七のや、議論をさす、論記法あり
二ハイ、ハッテンと振り廻りしを
ゆるを漢すと休めよと一ゆる
漢語を漢と深切を物あり、御堂に
の漢後と一程漢語うる味ありと
傍聴して心寄るに國する所あり

貧の方言ハイハッテンと云ふと平接統
詞也

此形正寺の生あり接統する小堂あり寺
漢る此かきくこと別語たあり切
事り深更に治四平夫を漢しと交と
よふし久米邦武武市あり伯の北
時代のををいづく漢語出る中、ある
の起る南北歌うと事ふ起る男も
よ起るしゆき法も入るありて板板の
かをさうけと事ありの語七出と
此のふあり三本の字を陣別しあり寺僧
れを出して余あり之れを改本るん

又實を以て徳の成り七國うらむし之を以て徳
の國者故に豆にんか早稲田の事いふ其
の裁法を以て武亦久米の二入とて法に之
の事とんと余試みる冊子を取つて之を以
韓使と稱し佩川等の意疎解して佩
川の自序を傳ふるも余評し余指節を
き亦抑ふ亦人の裁法の如くとも其を以て
一齊に之を以てコンナとの國人を以て豆を七段
に之を早稲田のこもきこもきといふは勿論
の人の後之を以て終る也を余この年
後より傳へく

刺を通して自ら命を今者之を以て
つとけりまはすといふ一時之政治運動を激烈
にせりたれども也一は其の事大なる後主を
あしむるも其の事大なる後主を
の既之を忘るしや其の事大なる後主を
とすや其の事大なる後主を
法を修るる方而は法を修るる方而は
既その事大なる後主を
しむるも其の事大なる後主を
す似し其の事大なる後主を
りしめの用ひたる事大なる後主を
とす佩川の事大なる後主を

めり此土也こた力の是い割を二珠をさ
船山を佩の子之似比物をよしくし
のみ船山の難を地名にかりたること論
休かうら佩川の寺書到る言ふまなく
精このちわ物も見えつけし心まを
とらうしあうん

休かうら中あかきま源武士の傳とあか
余初の日をを解とすゆ：坊州銘論
源美隠と題す一冊を得ぬ此の法親法
美隠の志初を合のりるをわたりと二
るを年銘論深に武士をを扱吹さる
武訓と石田一兵先づ之れを扱ひつ下の

山本常規にもり合を創布新に覺え又士
氣を鼓あしし美隠の二字をさし山本
の弟子地中にある物にんすの其の故
わす所をに美忠あるをわすも約する
又死の一言あるゆす一冊をりて回く余二代
の治備とともす所を死の一字をさし
印しし書とす美隠論中にも行を死
をさすすたな一冊を扱す

武士の死にむ本を執ることを大業
のうらうら美忠の死にむるを
さす武士の死にむるを
早後とらう忠もさるも美忠の

二つの道に於ては、
忠厚を自らこころせしむる

元々、
とあること

休賀の祭、
ふんを演説し

あし之れを面には
二其式を異する

市に演説し
一隊より狭隘の門

の路をぬき
一隊より

勘定より二十のまき
五つをとり

銅像建設
此余に

冬、
年、

伯、
う、

法、
伯、

伯、

古所よりとて早稲を種をなすにありて
九心早稲田子とて依賀の身と物と云ふも姑
けりし浦子と云ふは故に臨海に在りて東京の西
北の一隅に在りて早稲田と名を著して
十人の間渡りし早稲田の依賀の支店
の如きも亦也希くは早稲田の早稲田を
云ふも早稲田の子弟の如くは此の如
くは早稲田の早稲田を著して早稲田
に七人の如くは早稲田の早稲田を著して
其所に大木遠光の如くは早稲田の早稲田を著して
いふ事なりとて早稲田の早稲田を著して
早稲田の早稲田の早稲田の早稲田を著して

と云ふ事なりは早稲田の早稲田を著して
家の遺址跡を早稲田の早稲田を著して

依賀早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して
思ひまじりて早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して
支店内の枝分を早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して
市中を徘徊し早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して
旧年の市街を早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して
町也早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して
地を早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して
動の時許を早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して
ひるしと云ふ事なりは早稲田の早稲田を著して早稲田の早稲田を著して

其の松林を... 海に面し松林を包む風吹拂...
 此宮の位平地...
 大正元年十一月廿日

觀世音寺ハ比叡山延曆寺ニ屬シ清水山普門院ト稱ス源氏物語玉葛ノ卷ニ大貳ノ御館ノ下ノ清水ノ御寺ノ觀世音寺ニ參リ玉ヒシトアルハ即チ此寺ヲ指シタルモノニシテ實ニ九州無比ノ巨刹タリ而シテ正史ニ散見スル所亦枚舉ニ違アララスト雖トモ其一ニテ舉クレハ續日本記ニハ文武天皇大寶元年八月甲辰太政官所分觀世音寺封大寶元年ヨリ起テ計ルニ五歳ニ滿ツ並ニ之ヲ停止シ皆封ニ准シテ物ヲ施ス元明天皇和銅二年二月ノ詔ニ曰ク筑紫ノ觀世音寺ハ淡海大津ノ宮ノ御宇天皇(天智天皇)後岡本宮御宇天皇(齊明天皇)ノ御爲メニ誓願シ奉リテ基スル所ナリ年代ヲ累ヌト雖氏今ニ迄テ未タ了ハラズ宜シク太宰商量シテ使丁五十許人ヲ充駈シ及閑月ニ遂テ人夫ヲ差發シ專ラ檢校ヲ加ヘ早ク營作セシムヘシトアレトモ此際落成セサリシカハ更ニ元正天皇養老七年丁酉僧滿誓ニ勅シテ造營セシムラルル此時滿誓力

鳥總立足柄山爾船木伐
 樹爾伐暇都安多良船材乎

ト詠セル國詩ハ既ニ人口ニ膾炙シ又聖武天皇天平十年食封ヲ施サレ十七年僧玄昉僧正ヲシテ筑紫觀世音寺ヲ造ラシムトアリ其レ此ノ如ク天智天皇ノ御宇ヨリ聖武天皇ニ至ルマテ帝王八代八十余年ヲ經テ漸ク落成シ別院四十九院ヲ有スル宏壯雄大ノ寺院ナリキ又延喜式ニヨレハ修理料筑前國稅ノ内一万束筑後國稅ノ内一万束年々寄附セラレ朝廷ヨリノ保護モ篤カリシカ惜ムヘシ草創後四百余年ヲ經テ後冷泉天皇康平七年五月十一日白日ニ火起リ講堂金堂法塔四十二區ノ僧坊八十四間ノ廻廊寶藏鐘堂等悉皆烏有二暇セリ此時藤原師長太宰府ニ官タリ再興ヲ志シ治暦元年八月工ヲ起シ二年十一月落成セシト雖氏其構造ノ縮小セシ事舊觀ノ半ニモ及ハサリシト云フ其后星霜ヲ經ルニ隨ヒ風伯雨師ノ慘害ヲ受クル甚タシカリシカハ寛永八年藩主黒田忠之再興ヲ劃リ元祿元年黒田光之ヲ重建シ二年落成ノ式ヲ舉ク之レ即チ現今存在スル所ノ堂宇ニシテ之レ當寺ノ概要ナリ

佛体中國寶ニ指定セラレタルモノヲ舉クレハ	八尺五寸	天智天皇御願
聖觀世音菩薩	一丈八尺	天武天皇御願
不空羼索觀世音菩薩	一丈七尺	持統天皇御願
十一面觀世音菩薩	一丈六尺	大治年中大貳經忠寄進
馬頭觀世音菩薩	一丈二尺	當時別當維寬寄進
十一面觀世音菩薩	七尺二寸	空海作ト傳フ
毘沙門天	七尺	行基菩薩作ト傳フ
聖觀世音菩薩	四尺五寸	肥前國杵島海中得ルト傳フ
十一面觀世音菩薩	三尺四寸	作者不詳
彌陀如來	九尺	保安年中大貳長實ノ寄進
阿彌陀如來	七尺	作者不詳
持國天	同	同上
增長天	同	同上
廣目天	同	同上
多聞天	同	同上
彌陀如來	同	同上
地藏菩薩	同	同上
地藏菩薩	同	同上
其他寶物ノ重ナルモノヲ舉クレハ	同上	同上

一 梵鐘
 天智天皇ノ御寄進ニシテ世呼ンテ祇園精舎ノ鐘ト云フ菅公ノ詩ニ
 一 從謫居就柴荆
 一 都府樓綺看瓦色
 一 中懷好逐孤雲去
 一 此地雖身無檢繫
 一 石造狛犬
 一 陵王
 一 納曾利
 一 扁額
 一 古代伽藍圖
 一 銅製天蓋光心壹面
 一 古文書其他ハ略ス

都府樓へ百濟王ノ貢犬ト傳フ
 小野道風筆

福岡縣筑紫郡水城村
 觀世音寺

大正元年十一月廿日

リ河入を子孫年々入るる所を其の歌に記す

往年社殿を海まじと相見しはのり松林
七古し意をうしに近き遠海とさうて海
うし松林十年を記す疎とさうし由敵玉降
伏の勢を之の古もさく龜山帝の式十
枚とさく色紙と草子と深めさく紙とさく
擧大しと意を心うさるる名紙と公ある
日有し古とさく小宮の門の虫築一種而
白るき形式さう、松林由々大宮 齋園料
弄と為院あり、龜山帝日草の胡弓
あり一為心由名辭と記す上り二日市
見下軍 輕織と稱し先つ名親世音
寺と記すまことと名ん果とさく不利を



景行初野而のりすと利まき其感をえ入る
リ先つ武能驛より車窓をこぼれ山骨
のたつて運舟あり目と望むをんを回せり又之れ
を言ふと旭森の北をゆるし詩を喜ひ記す回
く武能驛終人の吾眼似をふ一野あり山
勢雄形峻峭言ふまきくし唯此規模の雄
大なるを^嶽國心とまき耳北地は名を
得あり終り一遊をゆす三洲坂をこき上る
田ありるるゆをまきもまきなるる油三
のまき地くし昔し伊集院に松を収てまきを
以つて世伊万記と一概に稱するも言ふまきの
まきまき所也わゆに大にしし二まき上る

田を山く貨物運搬の便宜を圓り物に及
けたるまきとまきく北を山形明嶋くし言ふ
べし西田驛をこきくの時親十二字を報す
伊集院しゆまき行くまき北驛にて乗換を
すも也日三河ゆをこき北地も平に橋三河
橋と云えん物所のゆまきを出る地は
改驛に於て午祭をまきく北地早改驛に
は臨すありまき右すんは休母保にあり左
すんは六村湾にありしんは六村驛も
三時百餘の行程里数三十八哩の間は六村
湾の沿岸に属し墜るる多き忽ち明島を
忽ちししと景行初野のまき大に或る地

を多け得るを此地の地や三其の(文)如不(を)
を免し(表)宜(う)し(七)ある(所)は(古)所(統)候(を)心
へ(ハ)差(お)る(所)の(所)に(余)を(之)を(思)ふ(を)あ(ら)う
し(免)余(の)味(味)と(思)ふ(を)し(ら)る(を)是(の)
の(案)内(を)と(校)る(中)に(も)送(校)し(一)種(の)
麦(り)の(方)面(の)あ(ま)ゆ(を)托(し)し(ら)る(を)而(七)果
し(て)成(印)する(を)さ(す)る(を)し
余(を)校(る)を(托)し(て)一(種)の(あ)ま(ゆ)を(以)て(す)る
次(き)う(を)養(神)の(あ)ま(ゆ)を(以)て(す)る(を)而(七)旅
亭(刺)重(界)並(三)を(校)る(の)あ(ま(ゆ)を(以)て(す)る
校(る)の(校)る(名)一(を)し(て)初(め)を(上)り(究)る(を)し(て)
勤(勉)の(あ)ま(ゆ)し(る)人(を)し(て)早(報)を(校)る

入(る)を(免)し(二)り(す)る(を)免(し)て(是)の(度)を(し)る(を)
或(心)と(る)ま(け)旅(入)し(て)一(種)の(あ)ま(ゆ)を(以)て(す)る(を)
の(免)見(物)を(借)し(て)此(の)を(就)さ(し)免(し)る(を)
を(免)し(て)あ(ら)う(を)校(る)を(校)る(を)し(て)初(め)を(上)り(究)る(を)
卒(業)未(済)者(を)し(て)免(し)る(を)と(云)へ(し)旅
亭
寺(に)免(し)る(を)山(家)佛(を)免(し)る(を)佛(を)免(し)る(を)佛(を)免(し)る(を)
候(を)寺(大)音(寺)聖(福)寺(等)を(免)し(て)此(の)を(免)し(て)
候(味)を(感)ず(る)を(免)し(て)地(支)那(式)の(建)築(を)免(し)る(を)
免(し)る(を)釋(刹)也(流)を(免)し(て)此(の)を(免)し(て)釋(刹)を(免)し(て)
七(後)身(を)免(し)る(を)交(へ)す(を)寺(の)を(免)し(て)免(し)る(を)免(し)る(を)免(し)る(を)
那(を)免(し)る(を)免(し)る(を)免(し)る(を)免(し)る(を)免(し)る(を)免(し)る(を)免(し)る(を)

人の治しは支那本土の格を名刺初め
長崎の格を格ける寺の格を満する保
つるを元見る格を格と或を元
歴功の寺の大概を右の如く

○福清寺 今北葉山の山寺あり
山の位職戒壇本位なるは此の山
あり歴年なるは木唐なるは
此寺保護寺也 寺の院山あり
所は三基の支那式の墓あり
海の墓なる本宅の後大略あり
寺の位寺の木唐方格の寺を
しと款とありありありあり此寺

○建梁形式異格也保護寺也
選定しし所以寺の位地を
の裏なる方丈の四壁に
○興福寺 黄葉名刹の一
支那式支那人の菩提寺なり
南東寺と系漢道の祀祖と
ある選定し此の寺の三
也

○興其寺とあり大刹なる
圓形の帆柁を以てし
以て形勢ありお抗を
雪山を掘き傳説し
此寺なり

○崇福寺 山門は即此筆の末一山筆の
款を掲ぐ竟永二年の物に八何林
親氏等遺すまゝありて隠元の在位
三ヶ年後即此寺を修すを終るに
福の人の菩提寺なるを以て成る
福の寺と云ふ境ゆゑ四石二斗を炊く
大谷の石を饒陸年の記念也
の 聖福寺 道隆殿心の開きたる寺誠
心と隠元の末子たる寺内福の寺を
り城心の巻城心の修治福の寺を
りう城心の福をえり位地と福
油寺とある

○大善寺 此寺は如法律の撰ひる傳
卷上人の碑あり
此寺を名刹中の名刹也此地の寺を三万
年前開基の寺ありし禪刹を隠木
即と關係あり故に筆然多く存す
隠木即と滋味をわたりしもの別し其
あり遺儀するに墨蹟の幅とさるに
より多く敬し花什無し
長崎の寺院寺多し且つ法橋とて
権大さるに隠木とて幕府の政略と
特と奨励し之を建てるに耶教
教田を産進し改めしなるものなるに耶教

通の墓を以て形式上定路を辨權を伏せ
うよよの長方形の石を置き其の一端に
堅石を以て之れを氏名致年を刻す、初
て見せしことして而も威し以て先角出
るるいづれの形式の墓なるも墓碑辭
るる其の西の墓を見たりと墓碑を
すりしなり

古時之地ぬか肉(田山)を以て其を支那
の名也史的聯志るるを而も其の威し
るるいづれの形式の墓なるも墓碑辭
るる其の西の墓を見たりと墓碑を
すりしなり

北山の一端に瘠死の山あり豊前坊と云
小月と云つた地を以て昇り斗牛の河
洲神と織眉山と云々を以て呼流
のあたりに絶景の山あり支那人投
山と名つけしところ此を折木其の
流の川を床に弄出流出一程の
政ちしゆ美山と支那人登攀あり
と記あり此名あり折山と海を
のぞく狼烟を以て所建の法候人
の狼烟を以て所建の法候人
を以て也と名頂上其の跡を
とす

何事も一ろくしと時をりききみも傳へる一二を
元々より過きかたしーホルトの居宅の跡を
流石の如くありしるほもさき紀の所しと云
度とゆし喰比し氏千枝と傳ある二三樹を
ありしと云居たの跡ありし
行の文を刻し遺地をさし
外より善しし氏のみし物おと邦人を
以て遇しと云歟し氏の碑と海浜神社
の苑内とありしん七一説す云加の流
を少くし城柵を築しとる木本男(先)の古
と市中とありしとるさきなんとも功り
家を改めると云ゆめのと目をとるさき

喰比屋をさの又舊をたぬと云又の遺柵
なる城柵をたぬと云又おけりし刻し金中
のありしとる現存し人往來する車と
下りて橋下をたぬと云梅(今)現存の文
と異ると云さき橋をたぬ城柵ありと云
法釈すると云改めと云し
長崎の道に心をさし酒の醸すると云物
の匠と云ことさき此地の割烹と云東京大阪
より何れも橋をたぬ一程お天地をたぬと
或許西洋風味支那風味もたぬと云
りともさき四のさきと云外園具と云
す割烹と云と云さきと云中功亭あり

符合るや、鍋を圍ひて喰ふさうさう、
段の膳物をも、京都うら、
此地も之れをいふ、
七可也、
を蓋す、
地、
巻、
か、

田山のすきと、
の家、
毛、
多、
十一

言を味、
物、

周、
ア、

ま、
ち、

え、
方、

校、
の、
の、
の、
右、

明治十年の頃徳見知敬氏の嚴父故知愛氏の編作にて白川小學生徒が愛誦せし有田沿革の大意善く盡し甚と面白く今尙記憶に存すれば茲に記す

● 有田沿革の史歌

夫長崎の縣廳を 北に距る事二十餘里
西松浦郡皿山は 戸數一千三百餘
人口凡そ六千人 陶器を産する土地にして
以前藩治の頃迄は 百數十戸の窯燒に
十六軒の赤繪屋と 其有數も限りしに
明治の始め辰の年 古昔に復る王政は
他人の權利を妨けず 民の自由も立伸て
同職稼も商賣も 次第に廣く成にけり
備燒物の始より 今に三百七十年
永正年の其昔 五郎大輔祥瑞とて
伊勢の人とも支那人とも云ふは儘に知らねども
支那の陶器の製造を 習ひ覺へて此郷の
善き其土を發見し 餘多の品を造りたる
古雅高等の染附は 他に比類なき器なり
其後慶長年中に 朝鮮攻の歸陣の時
連れ歸られし韓人の 金ヶ村の季參平
小城郡多久に住居して 燒物作り始めしに
宜しき土のあらざれば 家を移して此郷の
曲川なる亂橋 此に來りて遠近と

辿り歩行て見出し、其石土ぞ比類なき
寶有田の泉山 此頃迄は皿山も
木蔭小暗き深山にて 田中の村と云ひしこそ
金ヶ江氏を始とし 百田深海岩尾など
皆韓人の末ぞかし
皿山よりは程近き 里の畑中野頼より
堀出す古風の土燒は 何の時代に何人の

埋めて置し物ならん 唯堀出と唱へつゝ
舊きを好む風雅男の 貴び愛づる器なり
赤繪と云ふは伊萬里津の 東嶋氏が長崎で
支那の人より習ひしを 喜三左衛門と云ふ人に
教へ傳へて書けども 未だ色取も善からぬを
吳須權兵衛が苦勞して 宜敷き程を得たりこそ
其品物を長右衛門 又吉太夫と云ふ人が
長崎に出で賣しこそ 僅ながらも外國へ
輸出を成し、始なれ 其權兵衛と云ふ人が
更に歲月工夫して 色ここごに繪書きしを
正保三年六月に 酒井田氏の柿右工門
又長崎に持出で 賣弘めしも今は早
貳百餘年の古昔なり
此時赤繪も染着も 大に業や進みけん
窯燒畫工細工人 數千餘人もありしこそ

世に名も高き古伊萬里は 此年頃の品ならん
其後外國交易の 道も暫く絶たるを
久富與次兵衛藏春亭 深く歎きて我家の
力の限り盡しつゝ、遂に和蘭支那迄も
懸けて商賣開きしは 實に中興と稱すべし
禁裡御用の來歴は 寛文の頃奥州の
仙臺侯の伊達氏が 江戸の商人伊萬里屋の
五郎兵衛と云ふ者を 此皿山に遣はして
陶器を誂らへ造れども 是れぞと思ふ品ぞなき
時に辻氏二代目の 喜左衛門にて作り得し
器の勝れて有けるを 五郎兵衛携て
仙臺侯に進めけり 侯の喜悅限りなく
大内にこそ捧げしが 實に清らかに潔きよき
器なりとて其後は 絶す御用を勤めよこ
かしこき仰蒙りて

御所の御品を辻氏が 捧る事と成にけり
又四代目の喜平次は 安永午の六月に
常陸の掾に任せられ 名に聞へたる陶器職
玉の器の極眞は 此喜平次の發明ぞ
陶器を窯にて焼時は 只一面に並べしを
天秤又はトナミにて 積重ねたる其上に
又一際工夫して 二段重ねの天秤は

百田辰十始めけり 日耳曼國のワグチル氏
暫し此地に在しより、造れる品や繪葉の
遣ひ様など進みたり
過る明治の七年は 奧西利亞の博覽會
命を受けて平林 伊兵衛田代慶右工門
出品方を掌どり 高さ六尺餘りある
花瓶は名立し品なれや 名譽の賞を得たりける
深川深海辻手塚 陶器の珠に取添て
國の光を萬國に 輝さんの眞心を
四人壹つに戮せつゝ、上に願の許されて
結び固めし約束は 名も薫しき香蘭社
御所の御品は此社より 捧げまつれの命さへ
受けしは明治八年なり
明る九年は亞米利加の 費府の博覽會
四人力を勵まして 家の財は盡すとも
名譽は餘所に譲らじと 自費出品の奮發は
いかで目途の違ふべき 深海氏の墨之助
手塚氏なる龜之助 深川氏の卯三郎
此會場に渡航して 名譽の賞を採にけり
同く十年内國の 博覽會にも該社より
名譽の品を陳列し 續ひて翌年佛蘭西の
首府パリスの博覽會 備此節の出品は
又一層の手際にて 四尺に近き大鉢や

壹丈餘りの花瓶迄 取陳ねたる其中に
 白川學校生徒等が 書畫合作の額鉢は
 文務省の御品と 成りて貴く見へしとぞ
 受けたる賞の金牌は 謂はでも著き名譽なり
 時に深川榮左工門 佛蘭西のみか英國の
 龍動までも渡海して 器の繪柄恰好も
 西洋向きを目に覺へ 耳に聞きつゝ、要用の
 器械を彼に誂へて 十二年の春歸朝せり
 元來此處の學校は 其工業を旨として
 畫室も開け製作の 場所に器械も備はれば
 年稍長し生徒等は 正課の後の餘力にて
 陶器の業を習ふなる 三年五年年立たば
 就學の功や奏すらん

里を寔不急の汽車二の
 間乘り流りて五の
 くらり西の海舟の
 くら十のり秋深くゆき
 下

膝とどろと走り北の
 思ふ流海の
 小

慶元九年九月廿四日
 と漢通して切舟方
 式典の

もろく四の五の九の
 地馬、おれり野き
 には地をんとぬも
 こ一とと希ひつ北
 州の三四の五を
 寺とよふなるし

大正二年十一月廿二日
 のお島花に
 十七歳

